

『梅園画譜』とその周辺

磯野直秀

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1 著者毛利元寿について | 6 『横華園中輟集草木志』 |
| 2 国立国会図書館所蔵本について | 7 『皇代系譜』(内閣文庫蔵) |
| 3 錦窠翁筆筵会に出品された梅園の画譜 | 8 『梅園雑話』(天理図書館蔵) |
| 4 『梅園画譜』の構成と特色 | 9 元寿の周辺と博物学的活動 |
| 5 『梅園画譜』各論 | |

国立国会図書館蔵の『梅園画譜』全24帖は江戸時代でも屈指の動植物図譜として名高いが、著者毛利元寿梅園の経歴は長いあいだ不明で、元同館専門調査員の中田吉信氏の追求によって幕臣と判明したのはわずか数年前にすぎない⁽¹⁾。しかも、まだ不明の点が数多いし、個々の図譜の構成や内容もほとんど紹介されていない。そこで本報では、元寿の覚え書と最近判明した『横華園中輟集草木志』を含めて、その著作の概略をまとめておきたい(以下、書名中の「梅園」を省略することがある)⁽²⁾。

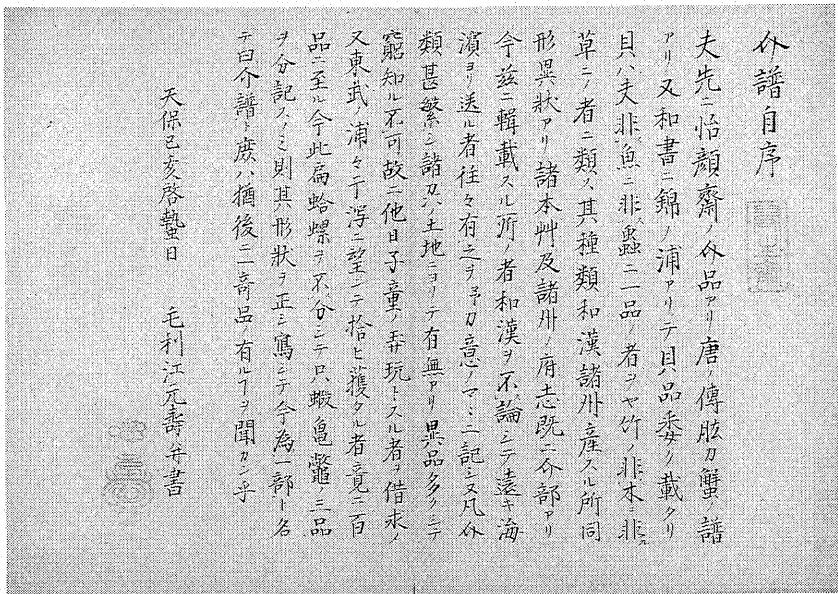
1 著者毛利元寿について

梅園は300石取りの旗本大江氏毛利元寿^{もとひき}である。これまで『国書総目録』も含めて野里梅園と混同されてきたが、野里は大坂の町年寄で別人であること、右田毛利長軌元寿説も誤っていることは上記中田氏の報文に詳しい。

『新訂寛政重修諸家譜』巻629と後述の『皇代系譜』によれば、毛利家はもと森姓だったが、豊臣秀吉に仕えた初代重政が毛利輝元の人質になったとき、秀吉の命で大江氏毛利に改めたという。元寿(1798~1851)はその第8代で、天保元年(1830)に父元苗^{もとひで}の跡を継いだ。通称は十郎左衛門、御書院番であった⁽³⁾。表1からわかるように、号は「梅園」(異体字を用いて「楳園」「某園」とも)のほか、「写生齋」「写真齋」「写真洞」「梅龍園」「攢(横)華園」「華魁舎」などさまざまで、「直脚」「白石瑛」「茗溪」「環」「蘆環瑛」とも記している⁽⁴⁾。著作に捺されている印も30種近くを数える(稿末の図4)。

元寿は白山(現文京区)の鶏声ヶ窪(傾城ヶ窪)に住んでいた。号「白石瑛」は白山に因むのであろう。屋敷は852坪で、多くの草木を植え、横華園と名付けていた。石蟹などが棲む「竹林小流」もあったと図譜からわかる。天保13年(1842)の大火で類

図 1 毛利元寿梅園の筆跡 (堀越氏蔵『梅園介譜』自筆本の序文)



介譜自序

夫先ニ怡顔齋ノ各品アリ唐ノ傳朕カ蟹譜
アリ又和書ニ錦ノ浦アリテ目ハ品委々ク載
貝ハ夫非魚ニ非蟲ニ一品者ヲヤ竹ノ非木非
草ニテ者ニ類ノ其種類和漢諸州産スル所同
形異狀アリ諸本艸及諸州ノ府志既ニ分都アリ
今茲ニ輯載スル所ノ者和漢ヲ不諭ニテ遠キ海
濱ヨリ送ル者往々有之ヲ意ナクニ記シ又凡各
類甚繁ニ諸又ノ土地ヨリテ有無アリ異品多クニテ
窮知ル不可故ニ他日子童ノ弄玩ニスル者ヲ借求
又東武浦々ニ浮ニ整ニテ拾ヒ獲タル者モ夏ニ百
品ニ至ル今此扁蛤螺ヲ不分明ニテ只蝦魚蟹龜ニ品
ヲ分記スノミ則其形狀ヲ正ニ寫シテ今為一部ノ名
ヲ白介譜ノ庶ハ猶後ニ奇品有ルヲ聞カン乎

天保乙亥啓蟄日 毛利江元壽 序書

元寿の筆跡の特徴は、①「言」扁の横棒のうち、もっとも下のものが一番長い；②「有」などに含まれる「月」の下横棒が下寄りで「日」のように見える；③「不」の左斜棒が縦棒を貫き、末端ではねる；④「毛」の下側が「モ」のようになることが多い；⑤「梅」「海」などに含まれる「毎」の上部が「ム」になる等であるが、その特徴はこの自序で明らかであろう。そのほか、⑥「園」の中央の「口」が「糸」の上部ようになる (図2右)；⑦「夏」の上部が「ケ」になる (図2左)；⑧「鬼」の上の点を欠くことが多い、なども特徴に数えられる。

焼した折には一時麻布龍土町に住んだが、やがて白山に戻っている⁽⁵⁾。

元寿の博物誌以外の著作としては、父との共編著『皇代采譜』と『梅園雑話』が知られているが、図譜類を含めて刊本は一つもない⁽⁶⁾。

2 国立国会図書館所蔵本について

国会図書館が所蔵する『梅園画譜』24帖は、『梅園禽譜』1帖、『梅園魚譜』3帖、『梅園介譜』1帖、『梅園草木花譜』17帖、『梅園海石榴花譜』1帖、『梅園菌譜』1帖からなり、文部省作成の『梅園百花画譜目録』1冊が付属する。『草木実譜』1冊と『樞華園中輟集草木志』2冊も元寿の著作である。表1は『梅園画譜』の一覧だが、同一図譜でも巻によって題名が異なったり、図譜によっては巻頭と目録で題名が違うこと、元寿がさまざまな号を用いたことがわかる。

『梅園画譜』には、「文部省図書印」「文部省書庫」「東京図書館」などの印がある。

表1 『梅園画譜』24帖一覧⁽¹⁾

題名(通称)	巻頭題字	序文の署名	序文の年	目録の題名	目録末尾の署名	帖尾の署名
梅園禽譜	梅園禽譜	毛利元寿院/梅元寿	天保10年	写生斎梅園禽譜 巻一	毛氏江元寿梅園直脚	
梅園魚譜 一	梅園魚譜	毛氏梅園元寿	天保6年	写生齋魚品図正 巻一	毛氏江元寿梅園環	写生齋某園
梅園魚譜 二	梅園魚品			写生齋魚品図正 巻二	毛氏江元寿梅園環	写生齋梅園
梅園魚譜 三	梅園魚譜			写真洞魚品図正 巻三	毛利大江元寿梅園白石瑛	毛元寿
梅園介譜	梅園介譜	毛利江元寿	天保10年	写生齋海虫介譜		大江氏梅龍園
梅園草木花譜 春一	梅園草木横花画譜	毛利江氏元寿院	文政8年	梅園草木花譜 春之部一	毛氏江元寿梅園直脚	毛梅園元寿
梅園草木花譜 春二	梅園草木花譜			梅園草木花譜 春之二	毛利江元寿梅園白石瑛 ⁽²⁾	毛梅園元寿
梅園草木花譜 春三	梅園草木花譜			梅園草木花譜 春之部三	毛氏江元寿梅園直脚蘆環	江元寿
梅園草木花譜 春四	梅園草木花譜			梅園草木花譜 春之部卷四	毛氏江元寿梅園茗溪	梅龍園
梅園草木花譜 夏一	梅園草木華譜			梅園草木花譜 夏之部一	毛氏江元寿梅園直脚	毛梅園元寿
梅園草木花譜 夏二	梅園草木花譜			梅園草木花譜 夏之部二	毛氏江元寿梅園直脚	毛梅園元寿
梅園草木花譜 夏三	梅園草木花譜			梅園草木花譜 夏之部三	毛氏江元寿梅園直脚	江元寿
梅園草木花譜 夏四	梅園草木花譜			梅園草木花譜 夏部卷之四	毛氏江元寿梅園直脚	梅園元寿
梅園草木花譜 夏五	梅園草木花譜			梅元寿草木花譜 夏之部卷五	毛氏江元寿梅園直脚蘆環瑛	梅元寿
梅園草木花譜 夏六	梅園草木花譜			梅元寿草木花譜 夏之部卷六	毛氏大江元寿写生齋梅園	江氏写生齋
梅園草木花譜 夏七	梅園草木華譜			梅元寿草木花譜 夏之部卷七	毛氏大江元寿写生齋梅園	写生齋
梅園草木花譜 夏八	梅園草木花譜			梅園草木花譜 夏之部八	毛氏江元寿写真齋梅園	
梅園草木花譜 秋一	梅園草木花譜			梅園草木花譜 秋之部一	毛氏江元寿梅園直脚	毛梅園元寿
梅園草木花譜 秋二	梅園草木花譜			梅園草木花譜 秋之部二	毛氏江元寿梅園直脚	毛梅園元寿
梅園草木花譜 秋三	梅園草華譜			梅園草木花譜 秋之部三	毛氏江元寿梅園直脚	江元寿
梅園草木花譜 秋四	梅園草木花譜			梅元寿草木花譜 秋之部卷四	毛氏江元寿梅園写生齋	大江元寿院
梅園草木花譜 冬 ⁽³⁾	梅園草木花譜			梅園草木花譜 冬之部一	毛氏江元寿梅園直脚	大江梅園元寿花曆写草舎
梅園海石榴花譜	梅園海石榴花譜	毛利元寿梅園	弘化元年			
梅園菌譜	梅園菌譜	梅園毛利元寿	天保7年	写生齋菌譜 巻一		梅元寿

(1) 別画譜「草木実譜」には、原表紙に「写真齋実譜」の題、中扉に「写真齋梅園輯図 草木実譜」の題と「撰華園」「梅園直脚」「白山(?)石瑛」印がある。

(2) 目録の後の追記末尾は「天保十五年甲辰日華魁舍識」。

(3) 跋に対する文の末尾は「文政七年甲申冬十二月江氏元蘆環拜書」。

また、『帝国図書館和漢図書書名目録 第一編』(1893)にすでに記載されている。したがって、東京図書館時代(1880~1897)の明治26年(1893)以前に文部省から移管されたものだが、文部省の入手先・入手年、東京図書館への移管年は不明。

『介譜』を除く『梅園画譜』23帖と『草木実譜』はいずれも自筆だが、『介譜』は模写本である。模写であることは、①『梅園百花画譜目録』に「春之部五冊、夏之部八冊、秋之部四冊、冬之部一冊、魚品部三冊、鳥之部一冊、菌之部一冊。メ廿三冊」と記した後に、「明治十八年三月 介譜一冊写す」と記す(『海石榴花譜』は春之部のうち)、②筆跡が自筆(図1)ではない、③印がすべて手書きであるの3点から、明白である。『介譜』の巻頭題名が輪郭だけを墨で縁どった白抜きであるのは、模写の事実を示そうとしたと思われる。貝類やエビ・カニの図が精巧な模写なのとは対照的に、印の模写が雑で一見して手書きとわかる点も、同じ意図からであろう。

『介譜』の自筆本は、堀越増興博士が所蔵する。自筆本であることは、筆跡(図1)および押印から間違いない。第二次大戦後の入手というが、旧蔵者はわからない。

『国書総目録』と『杏雨書屋蔵書仮目録』(1936)には杏雨書屋が『梅園画譜』34冊を所蔵するとあるが、現在同書屋には存在しない。一方、東京大学理学部動物学教室には『禽譜』と『魚譜 三』の写本各1帖が存在する。ともに精巧な模写だが、旧蔵者は不明⁽⁷⁾。また、東京国立博物館には写本『梅園介譜拔書』のほか、後述するように、一連の『博物館図譜』中に『虫譜』からの模写図が多数存在する⁽⁸⁾。

なお、国会図書館には梅園画『魚図』(特1-3270)があるが、これは元寿筆ではないと中田が指摘した⁽⁹⁾。確かに、①4種の印はみな『梅園画譜』の印と異なる、②元寿の筆跡ではない、③片仮名の濁点を現在の半濁点記号で示すが、自筆本ではその例がないの3点から、『魚図』は別人の作と断定できる。

3 錦窠翁畫筵会に出品された梅園の画譜

『梅園画譜』が一般の目に触れた最初は、伊藤圭介の八十賀寿を祝って明治15年(1882)に開かれた錦窠翁^{てつせん}畫筵会と思われる。その出品書籍の解説『錦窠翁畫筵誌 書籍解題之部』(田中芳男編、1890刊)によると、このとき梅園の画譜類が下記の計10点出品された(氏名は出品者。解説は出品者による)⁽¹⁰⁾。

- ①梅園花譜、十八冊、水野忠雄・平野 勝：毛利江元寿文政八年ノ撰。
- ②梅園魚譜、写本三帖、水野忠雄・平野 勝：毛利江元寿文政八四年ノ撰ナリ。
- ③梅園禽譜、写本一冊、水野忠雄・平野 勝：毛利江元寿文政八年ノ撰ナリ。
- ④梅園菌譜、一冊、水野忠雄・平野 勝：毛利江元寿文政八年ノ撰著ナリ。
- ⑤梅園百花画譜、二十三冊、水野忠雄・平野 勝：毛利江氏元寿文政八四年ノ撰ニシテ、花譜ハ春夏秋冬ニ分チテ十八巻、魚譜三巻、鳥譜一卷、菌譜一卷ナリ。
- ⑥毛利梅園画帖、十三帖、伊藤圭介：文政年間幕臣写真斎梅園毛利元寿ノ集成ノ博物帖ニシテ、多年刻苦勉勵シ、動植ノ図説ヲ詳悉シ、ソノ精細実ニ考摭スベキモノナリ。遍ク世ノ博物篤志ノ士ノ眼ニ触レザルハ実ニ遺憾トス。植物中春部四帖、夏

部七帖，秋部四帖，冬部一帖，四季ノ部一帖，椿部一帖，魚譜三帖，禽譜一帖，菌部一帖等ナリ。

- ⑦梅園虫譜，写本一帖，町田久成：毛利江元寿ノ撰スル所，蓋シ文政年間ノモノナラン。
- ⑧写真齋実譜，一冊，伊藤圭介：是書毛利元寿氏ノ輯図ニシテ，梅桃杏李ヨリ蒲桃泰椒蜀椒ノ如キ微細ノモノ及ビ瓜薯等ニ至ルマデ，着色ノ詳図ヲ蒐メ，巻末海草数種ヲ附セリ……。
- ⑨梅園採葉紀行図会，写本二冊，伊藤圭介：毛利江元寿，嘉永年間採葉ノ為メ東京近傍ノ諸山ヲ経歴セシ地，即飛鳥山，羽黒山，井ノ頭，国府台ヨリ府中，小仏嶺，高尾山，大山，箱根，江ノ島，鎌倉，金沢等ノ真景ヲ着色密画ニ写シ，名所図会ノ如ク，神仏古跡名勝ヲ詳注セシ横卷ニシテ……。
- ⑩梅園採葉紀行図絵，二軸，伊藤圭介：梅園毛利江元寿氏ノ自筆画ニシテ，江戸近郊及近国ニ採葉セシ山野，着色ノ地図ナリ。例之，飛鳥，道灌山，下総船橋，真間，国府台，相州箱根七湯，江ノ島等ナリ。他日採葉ノ参考トスル，亦可ナラン。

この出品については，以下のことがいえよう。

(1) ①～④計23冊，⑤『梅園百花画譜』23冊，⑥『毛利梅園画帖幀』13幀は，同一構成の3セットと考えられ，国会図書館蔵『梅園画譜』から『介譜』を除いたものに相当する(草木計18冊，菌1冊，魚3冊，鳥1冊：ただし、『海石榴花譜』を草木に数えた)。したがって，文部省が入手したのは，この3セットのいずれかである可能性が高い。それを特定はできないが，書名と冊数から考えると⑤『梅園百花画譜』23冊だろうか⁽¹¹⁾。出品者水野忠雄・平野 勝のことはよくわからない。

(2) 『介譜』は含まれていない。

(3) 『写真齋実譜』は，伊藤圭介旧蔵の国会図書館本『草木実譜』であろう。

(4) 『虫譜』『梅園採葉紀行図会』『梅園採葉紀行図絵』の3点は，現在所在不明。

(5) ⑤『梅園百花画譜』が現国会図書館本として，残りの2セット——①～④計23冊と⑥『毛利梅園画帖幀』13幀はどうなったのか。杏雨書屋旧蔵の梅園画譜34冊はそのいずれかなのか。東大本『魚譜 三』と『禽譜』は，②『魚譜』写本3帖中の1冊と③『禽譜』写本1冊か。残念ながら，いま疑問を解く手掛かりはない。

4 『梅園画譜』の構成と特色

『梅園画譜』24帖はすべて折帖(縦27.5～28.0×横19.0～19.5cm)。図は自筆で，すべて彩色され，形態の特徴がよく示されており，大半の動植物は同定可能である。図が描画年代順に配列されていないので，画紙をのちに貼り継いだと思われる。

各図譜の構成はほぼ同じで，たとえば『梅園魚譜』巻一は次のようである。

[第1面 題字]「梅園魚譜」：題字には「錦江井久之書」と揮毫者の名があり，「土井漣之助」と本名を書いた小紙片が貼付されている。題字はすべて知人に揮毫を頼んでいて，揮毫者の号と印記があるが，本名の小紙片を欠く場合も多い。

[第2面 序文] 題「魚品図正 自序」, 末尾「天保六年乙未秋九月 毛氏梅園元寿撰輯」

[第3面 目録] 題「写生齋魚品図正 卷一目録」, 末尾「魚品図正目録終 通計数品八十種 毛氏江元寿梅園環撰輯」: 目録の部分はヘラで縦横の線を付け、各枠内に魚名を一つずつ記入している。この点は自筆の画譜全般に共通する。

[第4面以下 魚図] すべて自筆, 大半が実写。注記には、たとえば「海魚類, 多識編出, 丹魚」とまず漢名を挙げ、ついで「アカウヲ, 俗ナマリテ云アカウ。モイヲトモ言」と和名や方言を記し、「王氏彙苑ニ出ス, 緋魚」と異名も挙げる。また、「壬辰閏十一月十有八日真写」と注記がある。動植物とも大半の図にこの形式で写生年月日と実写/模写の別を明記するが、これは江戸時代の博物図譜では異例であって、本図譜の優れた点である。時にはより詳しく、「道灌山下流釣」「長崎産 尚勝翁送之」「魚商吉五郎持来得之」など、由来も記す。他書の引用や民間伝承、自分の見聞を記すこともあるが、そのような例は少なく、あっても短い。

[最終面] 「魚蝦数品通計八十種 写生齋某園筆」: 一般的に、目録と最終面に記す品数は描かれている品数と一致しない。本巻も実際には97品である⁽¹²⁾。

『梅園画譜』は、実写が大半を占める点が大きな特色である。江戸時代の図譜は、とくに獣類や禽類については、実写が意外に少ない。絵師の粉本類はもとより、従来実写とされてきた博物家の図譜類でも、検討してみると模写が多いのである⁽¹³⁾。もちろん正確な模写も稀ではない(前出の『梅園介譜』『禽譜』『魚譜 三』の模写本はその例)が、斑紋などの重要な特徴が模写の折に見落とされたり、あいまいになる場合が少なくない。その種の模写図は、動物学史資料としては混乱の種になるだけである。したがって、実写と模写を区別できる本図譜は価値が高い。

しかも、『梅園画譜』は写生年月日や産地、由来を付記する点で、さらに優れている。現在ではそのような記載を欠く資料・標本は無価値に等しいが、江戸時代の図譜でこの当然のことを実行した例はきわめて稀だった。もっとも元寿が体長などの測定値を記さなかったのは、科学的記載という意味では落第である。

『梅園画譜』には、珍しい動植物の記録がほとんど見当たらない。鳥類でいえば、稀な渡り鳥や迷鳥の図は皆無に近く、輸入鳥類の有用資料もない。全体的に江戸以外の品は数えるほどしかないが、元寿が身近で見られる動植物中心に描いたということは欠点ではなく、むしろ長所といえよう。『梅園画譜』を江戸の地方動植物誌として扱えるからである。江戸時代の図譜は数多いが、前述のように少なくとも動物では模写が多いので、全国のものが混在してしまい、しかも産地をほとんど記さないから、確実に江戸に産した種類を知るための資料といえば、岩崎灌園の『武江産物誌』などがあるにすぎないのである。『梅園画譜』はその意味で価値がある。ただ、図に描いた種類の分布や、出現時期、普通に得られるか珍しいかなどを記していければ、さらに価値が高まったのだが、その種の記事は残念ながら少ない。

元寿の短所は分類への志向が薄い点であろう。たとえば、『介譜』の貝類の個所では、淡水産/海産、巻貝/二枚貝の区分さえなく、ほぼ入手の順に多種多様な種類が雑然と

列挙されているに留まる。もっとも、江戸時代の博物家の多くは大同小異の姿勢であって、分類といっても『本草綱目』のそれに無批判に従う程度であった。

5 『梅園画譜』各論

(1) 『梅園禽譜』(請求記号, 別4224)

全1冊。計131品⁽¹⁴⁾で、うち23品が外国産。この図譜だけは模写が割に多い。序文は天保10年(1839)で、『介譜』序文と同日に記されている。写生年代は文政12年(1829)から弘化2年(1845)にわたるが、大部分は天保3~10年(1832~39)。

配列は最初が水鳥、ついで陸鳥の順だが、「水禽」「原禽」「林禽」「山禽」などの区別は立てていない。ただし、ツル、カモ、キジ、ニワトリなどは、それぞれ同一個所にまとめている。とくに珍しい種類は見当たらないが、「天保三年壬辰五月六日、於小石川馬場、同所之住北村弥門僕捕之、真写」と記したアホウドリの図(本個体の図は伊藤圭介の『錦築禽譜』[国会図書館, 特7-97]などにもある)は注目される。

(2) 『梅園魚譜』(別4222, 4223)

全3冊。別名は巻一と二が『写生斎魚品図正』, 巻三が『写真洞魚品図正』。巻一97品, 巻二67品, 巻三85品, 合計249品を所収。うち、人魚1, クジラ・イルカ14, ウミヘビ1, イカ・タコ6, クラゲ1, 不明2で、残る224品が魚類。人魚とクジラは模写図だが、ほかは実写が大半を占める。クジラのうち11品は神田玄泉著『日東魚譜』の写しである。配列に分類的な配慮はまったく見られず、海産魚と淡水魚も区分していない。

序文は天保6年(1835)、写生年代は天保3~嘉永2年(1832~49)だが、天保10年(1839)までのものが圧倒的に多い。

注記によると自分で釣った魚が少なくない。釣の場所は尾久川、綾瀬川、戸田川、王子川、不忍池、飛島山下、道灌山下、大森辺の海辺など。出入りの魚屋に日本橋の魚河岸を探索させるなど、魚商を通じて入手した例もかなりある。

(3) 『梅園介譜』(別4227)

全1冊, 別名『写生斎海虫介譜』。国会図書館本は模写だが図は精巧で、堀越氏蔵自筆本と構成もほぼ同じ。以下の記述は自筆本によるが、前者にも通じる⁽¹⁵⁾。

序文は天保10年(1839)。写生年代は文政10年(1827)から嘉永2年(1849)の約20年間にわたるが、ほとんどは天保3~10年(1832~39)に描いたもの。

本図譜は「水虫類」「亀鼈類」「蛤蚌類」の3部に分かれ、計323品を所収。最後に「源氏貝五十四種」54点と「新撰六歌仙貝」6点の図が付属する。最初の「水虫類」は計52品、甲殻類(エビ・カニなど)が主で、ほかにカブトガニ1とナマコ4を含む。「亀鼈類」はカメ5品だけ。「蛤蚌類」は全266品で、巻貝類と二枚貝類が242品を占めるほか、ツノガイ1, 頭足類2(タコブネ, オウムガイ), タツノオトシゴ1, ホヤ2, ウニ3, フジツボ・カメノテ4, 腕足類2(シャミセンガイ, ホウズキガイ), ガラス海綿1(ホッスガイ)なども混在している。巻貝類/二枚貝類, 海産/淡水産などの区

分はない。

『介譜』では他人の所蔵標本を借りてスケッチした例が多い。とくに「本郷町医和田氏」所蔵品は110品にも達するし、ウチワエビ、オオムガイ、タコブネ、ホッサガイなどは同僚倉橋尚勝の所蔵品である。

(4) 『梅園草木花譜』

『草木花譜』は全17冊で、春之部4(別4231)、夏之部8(別4232, 4311)、秋之部4(別4312)、冬之部1(別4321)に分かれる。品数は春之部347、夏之部620、秋之部274、冬之部34(春の花の追加を含む)、計1275品。別名『梅園百花画譜』は、「冬之部」の「梅園先生百花画譜跋」(文政7年12月、杉原 郁)に由来する。

「春之部」巻一の序文は文政8年(1825)で、『梅園画譜』のなかでもっとも古い。図も文政3年(1820)から嘉永2年(1849)と長期間にわたるが、天保初年までの図が大半を占める⁽¹⁶⁾。配列は描画年代にほぼ従っており、「春之部」では、巻一が文政3～7年計106品、巻二は前半が文政7～8年の37品と後半が弘化元年～嘉永元年の26品、巻三文政9～12年81品、巻四文政12年～天保11年97品となっている。

対象は草木一切で、草と木は区分されていない。ただし、「細辛 サイシン」の図には「菜類」、「卷耳 アサマカツラ」には「雑艸」というように、多くの図に「花艸」「花木」「水艸」「雑艸」「雑木」「果木類」「穀類」「菜類」「菓草」「民用類」など、計20種類の小印が捺されている。これは『大和本草』の分類と用語に拠ったもので、『草木花譜』だけに見られる方式である。

また、『草木花譜』の各帖の最初には「梅園直脚花譜家伝画帖蔵印」、最終面には「不認模写」印と、「文政八己酉出来」あるいは「文政十一戊子出来」などの印が捺されている(図4)が、これらの印も『草木花譜』だけに存在する。最後の印はそれぞれの画帖の一応の完成年を示しているらしい。

(5) 『梅園海石榴花譜』(別4226)

全1冊。海石榴(ツバキ)の諸品種だけを描いた図譜で、全65品。うち31品は渥美氏から貰ったものだが、同氏の身上は不明である。序文は天保甲辰=弘化元年(1844)で、『梅園画譜』のなかでもっとも遅い。写生年は弘化元年と同3年だけである。

(6) 『梅園菌譜』(別4225)

全1冊。木蕈類(木にはえるキノコ)と地蕈類(土にはえるキノコ)の2部に分かれ、前者は39品、後者は120品、計159品を載せる。うち2品は種子植物のギンリョウソウ。ほかはいわゆるキノコ類で、若干の子囊菌類のほかは担子菌類。

序文は天保7年(1836)、写生年代は文政8年(1825)～天保11年(1840)だが、天保6～8年が多い。7年8月には7～14日に板橋の根村西津原で採集しているし、「天保八丁酉年九月六日、望菌狩、所々山林ニ入、既ニ此ニ武州多摩郡中野村井ノ頭大盛寺山中ニ此者〔楼蕈〕ヲ得タリ……夫ヨリ大宮八幡宮山中……帰道中野法泉寺山中ヨリ上落合下落合ニ至リ、氷川山中ニ入」と、探索地がわかる注記もある。

(7) 『草木実譜』(特7-163)

全1冊、伊藤圭介旧蔵。別名は『写真斎実譜』。一連の『梅園画譜』には含まれず、

体裁も異なり、縦27.3×横21.5cmで、厚手の和紙46丁を袋綴にしてある。原表紙の題簽には「写真齋実譜 附 根類 海苔類 全」と記され、その脇に「旧幕士毛利梅園氏ノ自筆図ニシテ……」という伊藤圭介の注記が、見返しには本草家賀来飛霞の同じ意味の文が貼付されている。

中扉には4本の縦罫線が引かれ、中央欄に大きく「草木実譜」、右欄に「写真齋梅園輯図」、左欄に「根類 海草類」と記され、右欄には「攢花園」、左欄には「梅園直脚」「白山(?)石瑛」の印記がある。原表紙・中扉とも自筆と思われる。

序文と目録はなく、すぐ図譜部が始まり、最初に果実類157品、次にイモ1品、最後に海藻30品、総計188品を載せる。果実類は、果物・野菜・穀類・木の実・草の実と、植物学的な意味での果実全般。分類学的な区分はないが、ミカン・スモモ・モモ・ナシなどはまとめてあり、それぞれ数品種を描く。この『草木実譜』の図には写生年月日の記載が一つもなく、いつ頃描かれたものか不明である。

(8) 『梅園虫譜』

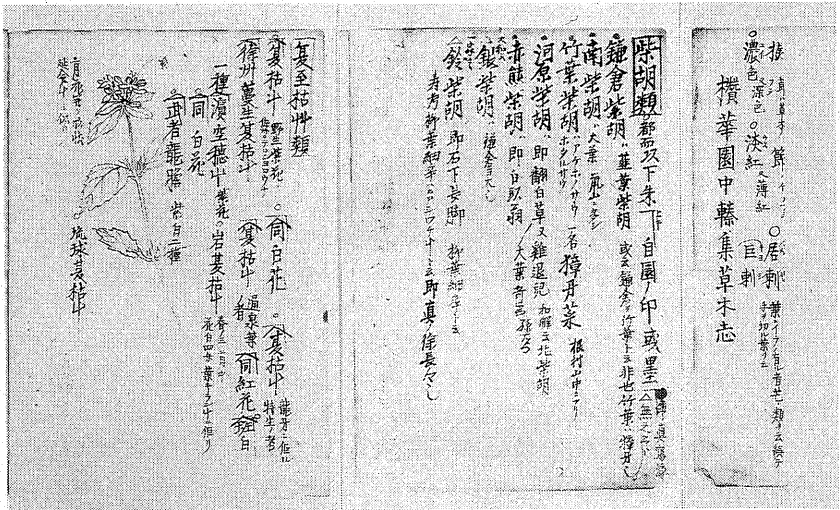
3節で記したように『虫譜』は行方不明だが、東京国立博物館が所蔵する一連の『博物館図譜』に、『虫譜』の模写図が多数存在する⁽¹⁷⁾。

この通称『博物館図譜』は、明治8～14年の「内務省博物館」時代に田中芳男らが作成したといわれるもので、江戸時代の博物家と画家（栗本丹州、岩崎濯園、関根雲停など）の図譜や画帳の図を切り取って貼ってあるほか、画家の服部雪斎や中島仰山が新たに描いた絵も加えてあり、各図には筆者を示す小印（「クリモト」「雲停」「仰山」「雪」など）が捺されている。『梅園虫譜』からの模写と思われる絵もその一つで、この場合はすべて四周単辺の枠を刷った和紙を用い、「梅園」の小印がある。大半の絵には『梅園画譜』特有の形式による年月日の記載（「甲午林鐘十五日真写」など）があり、対象が往時の「虫類」（昆虫のほか、爬虫類・両生類・ミミズ・カタツムリを含む）ばかりなので、『梅園虫譜』の模写であることは疑いない。3節で述べたように、明治15年には町田久成が『虫譜』の写本を所有していたが、その町田が当時の博物局長（館長）であった。したがって、これらの図は町田本からの模写と考えるのが妥当だろう。模写図に関するかぎり、昆虫などの特徴はあまり正確ではない。

このような模写図が『博物館虫譜』和968本の甲・乙両冊では462品に達し、図のある頁の49%を占めて、2位の関根雲停の27%をはるかに引き離している。そのほか、『博物館虫譜』和959本に17品、『博物館介譜 柔軟類多肢類』に5品、『博物館動物図譜』に3品、『梅園介譜拔書』に1品あり、計488品にのぼる。内訳は、節足動物（大半が昆虫とクモ）457品、爬虫類4品（トカゲ、ヘビ）、両生類8品（カエル、イモリ）、軟体動物6品（カタツムリなど）、環形動物など8品（ミミズ、ヒルほか）、菌類（冬虫夏草）5品。

もちろん、これが『虫譜』のすべてではないだろうが、数の多さと所収種の構成からみて、その大部分であると思う。写生年代は大半が天保2～8年（1831～37）で、ほかには天保12年（1841）と嘉永元年（1848）の各1点だけである。

図 2 『横華園中輅集草木志』：右，上巻 2 オ；中，同 2 ウ；左，同 50 ウ。



2 オは本来の和紙右側部分を切断して貼り付けているので、字句の一部が切れている。左端には題名が記されている。2 ウは本文冒頭で、「柴胡類」(サイコ類)を取める。左端「寿考……」の文に注意。上巻 50 ウは「夏至枯艸類」(カコソウ類)を取める。「夏」の字に筆跡の特徴が出ている(図 1 注) ことと、岩夏枯艸に「春ノ三」とあることに注意。

6 『横華園中輅集草木志』

国会図書館には『横華園中輅集草木志』(111-326)と題する稿本が所蔵されている。上下 2 冊(縦 24.4×横 16.4cm：上，77丁；下，86丁)，書名は本文 2 オ左辺に記されている題名(図 2)に基く。別名は『採薬記行』だが採薬日記の類ではなく、題中の「草木志」が実態に近い。著者名や印は何処にもないが、「横華園」の号から毛利梅園のものではないかと調べたところ、予想どおり元寿の植物覚え書と判明した。その理由は次のとおりである。

- ① 「横華園」は元寿の号の一つである。ただし、「攢花園記」印および「攢華園」印(図 4-21, 22)には手偏の「攢」を、「横華園」印(図 4-23)および本書の表題と『梅園雑話』には木偏の「横」を使っている。「攢」「横」とともに「集まる」「集める」の意である。
- ② 上冊に残る原表紙に「魁華舎」とあるが、元寿は「華魁舎」の号を用いていた。
- ③ 「寿考……」, 「寿案……」, 「梅按……」など、元寿の「寿」や梅園の「梅」で始まる注記が見られる(図 2 中)。
- ④ いくつかの植物に「春ノ三」「秋ノ四」などの注記があり(図 2 左), 『草木花譜』の該当巻にその植物が描かれている。

⑤ 本書の「黄連」「七種之説」「黄花草」などの文は、『草木花譜』で対応する植物の注記に瓜二つないし酷似する。

⑥ 本書下冊「梅ノ類」で「江梅」の異名に「直脚梅」を挙げるが、『草木花譜 春一』「野梅」の頃に「直脚梅ト名ヅク」とあるように、この別称は元寿自身の名直脚に因むもので、他人の書物に出てくるはずがない。

上記の諸点から本書は元寿の作と断定できる。しかも、その筆跡は、図1に注記した特徴から元寿のものに間違いない。

『横華園中輦集草木志』（以下『草木志』）の「輦」は「集める」の意。これは〔横華園中／輦集／草木志〕と読むのだろう。横（攢）花園は元寿の自園の名（8節参照）で、本書はその植物リスト作成が目標の一つと考えられるからである。

『草木志』は厚手の紙からなるが、よく見ると、元来は表紙とも薄手の和紙だったのを厚手の紙に貼り直したとわかる。薄手の紙の各丁に左右対称の破れ跡や虫食い跡が残るから、破損がひどいので補修したのであろう。なかには元の紙を切り取った跡も見られる。ただし、元寿自身が補修したのか、後人によるのかは不明である。

原表紙の「採葉記行」「魁華舎」の字は元寿の筆跡と思える。ついで、見返しから1ウにかけては清の州名・都市名、欧亜の国名・地名、斑入り植物の用語が列挙されている。続く2オと2ウを図2に示すが、2オは右方の大半が切り取られていて、残る字も一部分が欠けているのがわかる。残った字句から推察すると、この頁には色彩用語と植物の形態の用語が記されていたらしい。先の国名などと合わせて、心覚えのためと思われる。そして、その後に『横華園中輦集草木志』と書名が記されている。

図2でわかるように、次の2ウ冒頭右端には「^{スベテ}都而、以下……墨●印真写済、△無之印」と記号の説明がある。その後が本文で、2ウでは^{サイコ}柴胡類7品を挙げ、それぞれ漢名・別名・和名・特徴・産地などを記す。「大和〔本草〕云」と最初に出典を示す場合もあるし、左端の「寿考……」のように私見を述べる例もある。本書の記載は大半がこの形式で、時に図も添える（図2左）が、彩色されてはいない。

『草木志』には、この「柴胡類」のように線で囲んだ見出しが方々に記されており、その前後に該当する植物が列挙されている。見出しは、「水木類」「水草類」「百合類」「菊類」「日光産」「実ヲ愛ス者」「花ノ時無葉類」など、雑多な約180項。ただし、起筆後しばらくしてから見出しを付けてまとめる方が便利と思いついたらしく、最初のうちはいろいろな植物が混在して見出しもない個所が少なくない。

見出しは「百合類」「菊類」「蘭類」など自然分類的な名が多いが、「毒草」「冬木類」「実ヲ愛ス者」「草木刺針有ル類」など、人為分類的な見出しも見られる。要するに、自分の便宜のための見出しであろう。もっとも、配列に規則性は認められず、整理も充分とは言いがたく、単に自分の覚え書として記したものと思える。

『草木志』がいつ頃に書かれたかは明記されていないが、嘉永元年と2年に訪れた高尾山や箱根、江ノ島の地名が散見され、本文の年記載も「嘉永二年」が数回見られるだけなので、最晩年のものだろう。

図 3 『皇代系譜』11巻にあるハクビシンらしい獣の図。



7 『皇代系譜』（内閣文庫蔵）

全12冊（縦23.3×横17.0cm），別名『皇代年秘録』。神武天皇から弘化4年（1847）までの編年史で，巻一～二は「江家毛利元苗輯編，同氏男元寿謹識増補校合」，巻三～十は「窪月軒毛利元苗鬼遊糺編，梅龍園毛利元寿石瑛重校」，巻十一は「梅龍園毛利元寿石瑛編著」，巻十二は「攢華園毛利元寿石瑛編著」と記す。すべて元寿の自筆なので，父元苗の遺稿を元寿が増補・清書し，巻十一・巻十二を自らが編集したと考えられる。

本書は江戸の出来事（火事，地震，犯罪など）や，幕府の行事，幕臣の任免を中心とする編年体の世相史であるが，自家に関する記述が含まれるほか，享保13年（1728）渡来の象や，文政7年に江戸に来たラクダ，両国橋で捕えられたイルカ，江戸城竜ノ口堀のオオサンショウウオの話など，博物学的な記事も少なくない。

なかでも注目されるのは，天保13年（1842）の頃に「此年七月初旬ノ頃，周防国富田村政所丁ノ辺，毎夜類ニ犬吼騒ぎ……〔2人の若者が苦心の未〕猫ニ少シ大ナル獣……〔ヲ〕活捉……蛇や墓ノ類ヲ与へ見ルニ食スル……依テ写ス処，如此。貉ノ衆類ニテ，面狐ニ似テ狸ヨリハ長シ。四足，熊ニ善ク似タリ。然レドモ小獣ニシテ，猫ヨリヤヤ大ナリ。日ノ内ハ能ク睡ルコト死タル如シ……八月此獣ノ図並此説ヲ載セテ長州表ヨリ差越，瀬能吉次郎其一紙ヲ給ル」とある記事と図である。図3がそれで，着色されていないが「色ウスクリ色，耳エリ白色」と注がある。

これはハクビシンらしい。ハクビシンはアジアに広く棲むジャコウネコ科の獣で本州や四国でも発見されているが，それが土着のものか，外来の飼育個体がこの数十年間に野生化したのか，両論がある。従来も，土着説の証拠に江戸時代に描かれた図が

挙げられているが、正確さの点で劣り、決着はついていない。しかし、本図の獣は、ハクビシンの特徴である顔面の白い筋、黒い脚、長い尾が明確だし、夜行性らしい点、大きさや食性など、すべてがハクビシンに合致する(顔がやや細長すぎるが)。本種が江戸時代に生息していたことを裏付ける有力資料と思われる。

8 『梅園雑話』(天理図書館蔵)

全3冊(縦23.3×横17.0cm)、自筆本、伊藤篤太郎(圭介の孫)旧蔵。白紙を除き、冊一、38丁；冊二、38丁；冊三、30丁の計106丁。表紙題簽は「梅園雑話 一(二、三)」(自筆)、冊一卷頭には「見聞集附録 大江私記梅園雑話」の題と「東陽 横華園毛利大江元寿編」の署名がある。序文末尾には「天保甲辰十五年」とあり、「大江氏」「元寿之印」(図4-17, 13)の2印が捺されている。冊三の巻末には、元寿の博物学的著作を挙げた伊藤篤太郎の識語と、「……梅園草木図原本、帝国図書館蔵にて、残巻二冊帝国大学図書館に有之候」という奥村繁次郎の記がある⁽¹⁸⁾。ともに明治43年(1910)8月4日に記されたもの。

序文には、重要な記述がある——「……予、礪川[小石川]白山に居せる時は草花を友とし、横華園と阿部棕軒君[阿部備中守、注記3参照]より園号を賜る。天保の寅の十三、三月七日、火□ありて[大火で類焼]、麻布龍土の長州家[麻布龍土町、松平毛利大膳下屋敷]へ養れせし内、号を梅龍園と改。梅龍園の号を記せしは麻龍居の著編なり。初名は梅樹園、後に横華と号す」。これによって、号の由来と使用時期が一部判明したが、現在の著作には「梅樹園」の号は見られない⁽¹⁹⁾。

本書は題名どおりの雑話集で、「酒食の毒解」「廿四孝七賢人」「鬼門を避る話」「柿本人麿」「稻荷大明神」「官位」「蔵人事」など、約70項目が並ぶ。大半は他書の抜き書きである。動植物の記事も多少あるが、興味深いものはない。

なお、国会図書館蔵の『梅園雑話』(210-356)は、別人による刊本である。

9 元寿の周辺と博物学的活動

『梅園画譜』の題字揮毫者のなかで経歴が明白なのは、阿部備中守正精(福山城主、10万石)、高木伊勢守守富(5000石)、土井漣之助(5000石)、大林弥左衛門(200俵)、跡部宗左衛門(160石)、桂川甫賢(桂川家第6代、200俵)である⁽²⁰⁾。身元がまだわからない大江広篤、河野中吉、土屋周助、千坂一学、佐竹義行などの揮毫者も、幕臣かその周辺の人々と思われる。しかし、この人々の名は図譜の注記に出てこないで、博物学的交流があったかどうかはわからない。

一方、博物学上の関係者としては、『草木花譜』で元寿がしばしば植物を貰ったと記している妍芳子がいる。この人は、大名・幕臣の著名な博物学同好会「緒鞭会」の一員だった設楽貞丈妍芳園(1400石)である。そのほか、『禽譜』『介譜』『草木花譜』に多出する倉橋勝尚は同僚の幕臣(100俵、御書院番)である⁽²¹⁾。また、同役と記されて

いる小沢弾正や、医師大館仁山、町医神谷玄雄、同和田某などからも多くの資料を提供されている。

この人々のなかで博物家として名を残しているのは設楽妍芳園だけである。逆に、同時代の他の博物家の著作や図譜には、前述の『錦窠翁壘筵誌』を除いて、元寿の名は登場しない。設楽妍芳園は知人であっても、元寿は楮鞭会とも無縁だったようだ。江戸時代の博物学には、後世に名を残さなかった同好者があまた存在し、その興隆を底辺で支えていたのだろう。元寿もまた、その一人だったのにちがいない。

元寿の博物学的活動の軌跡は画譜に記された年代が唯一の手掛かりだが、彼がまず興味を示したのは植物だったらしい。『草木花譜』から推察すると、その活動は23歳の文政3年(1820)に突然始まり、以後約10年あまり植物に全力を集中した。ところが、天保2年(1831)34歳の頃から動物に関心に移ったらしく、『草木花譜』への描画が激減し、代わって『禽譜』『魚譜』『介譜』『虫譜』が主役になる。もっとも、天保6~8年(1835~37)にはキノコ類に熱を上げている。しかし、天保10年(1839)42歳のときを境に、以後数年間は動植物の記録がほとんど無い。

活動の再開は弘化元年(1844)47歳のときで、『海石榴花譜』をものし、『草木花譜』にふたたび筆を取りはじめた。「夏八」だけでも、嘉永元年(1848)には18品、翌2年には43品もの図を描いており、植物への情熱が以前にも増して高まったことを示している⁽²²⁾。注記によると、嘉永元年9月には高尾山、2年3月には箱根で採集しているが、これは『錦窠翁壘筵誌』の『梅園採薬紀行図会』の解説、「毛利江元寿、嘉永年間採薬ノタメ東京近傍ノ諸山ヲ経歴……」(3節参照)に符号する。それによれば、彼はこの頃、小仏、高尾山、大山、箱根、江ノ島、鎌倉、金沢などを巡回しており、『介譜』と『草木志』にも対応する記事がある。

元寿はそれまで江戸を離れて採集に出た形跡がない。晩年になって初めてゆとりができたのかもしれない。しかし、嘉永2年前半には数十点の図があるのに、『草木花譜』の記録は「夏八」の嘉永2年6月29日で突然途切れる。『草木志』に見られる日付も同年10月5日が最後である。

植物熱が高揚した後のこの突然の中絶は異様に思える。そして、翌々年の嘉永4年(1851)8月7日に、元寿は54歳で世を去った。法名は梅園院善慶道全居士、墓は東京三田の正覚院にある。

注 記

- (1) 中田吉信(1985)、「毛利梅園考」、『参考書誌研究』、30号、1-8；中田吉信(1986)、「毛利梅園」、『アニマ』、1986年12月号、66-69。
- (2) 引用文では漢字と仮名に現行字体を用い、濁点と句読点を適宜加えた。引用文中の〔 〕は磯野による注である。
- (3) 『皇代系譜』文政5年(1822)12月24日の項に「元寿……両御番御番人彼仰付……御書院番諏訪備前守組二入」とあり、それを言い渡したのは『草木花譜 春一』の題字を揮毫した阿部備中守だった。また、天保元年(1830)には、「五月四日、父兵橋遺領元寿エ無相違被

下置旨、御老中青山下野守殿被仰渡」とある。

- (4) 号の由来については、8節を参照。
- (5) 『皇代系譜』享和3年(1803)の項に、「白山鶏声ヶ屋舗へ引移」の見出しで、「毛利兵橋元苗……願之通被仰渡、是迄拝領屋舗木挽町築地五百坪寄奇有馬熊五郎へ相渡、大塚土井大炊頭下屋舗之内八百五十二坪ヨ請取」とある。また、天保13年(1842)に「三月七日、朝ヨリ南大風。昼四ツ半過ギ赤城豆腐屋ヨリ出火、夫ヨリ小日向一円〔と広がり〕……元寿此時類焼、三月十五日麻布檜屋舗へ移」(8節参照)、弘化2年(1845)に「八月廿五日……白山拝領屋舗普請手斧始」とある。子息の代になるが、嘉永5年(1852)刻の近吾堂版切絵図「白山駒込辺之図」に見える「毛利兵橋」屋舗の位置は、現文京区白山5-29に当たる。
- (6) 『鳥の手帳』(小学館、1989)に『梅園禽譜』、『魚の手帳』(小学館、1991)に『梅園魚譜』の図が多数掲載されているが、全ての図ではなく、順序も原本とは異なる。両書は掲載種の解説に力点が置かれ、図譜自体についてはほとんど触れない。
- (7) 同教室の助手だった岡田信利(杉田玄白の曾孫)が明治24年(1891)に出版した『日本動物総目録 有脊動物部』(金港堂)の「引用書目」に『梅園禽譜』『梅園魚譜』の2点だけが挙げられているので、この2点は当時から同教室にあったと考えられる。注(8)参照。
- (8) 『梅園介譜抜書』は、森 鷗外の『帝室博物館書目解題』(鷗外全集、20巻、p.463、岩波書店、1973)に「明治十年模写」とある。全56品(『梅園介譜』からの模写55品と、『梅園虫譜』からの模写と思われる1品)だが、この模写図は自筆本および国会図書館本より色彩が派手で、真を伝えない。
- (9) 注(1)文献。
- (10) ①~⑦の解説に「文政八年ノ撰」「文政年間ノモノ」とあるのは『草木花譜』序文に基くもので、個々の図譜の実態とは異なる。
- (11) 『草木実譜』貼付の伊藤圭介の付箋(5節(7)参照)に「梅園ノ著述ノ動植物画書(?)数十冊、文づ省ハ買上ニナリタリ」と記されている。この書き方から、文部省購入の品は圭介蔵のものではないように受け取れる。
- (12) 同一画面あるいは連続画面に雌雄、背腹または2個体以上が描かれていても、元寿が全体に一つの名を与えていれば、「1品」と数えた。名称だけで図を欠くときは数に入れなかった。このような際に「何種」と記す報文があるが、「種」では現在のSpeciesと紛らわしいので、「品」を用いるのが適切であろう。
- (13) 磯野直秀(1992)、「江戸時代の禽類図譜と養禽書」、『慶応義塾大学日吉紀要/自然科学』、11号、9-38。
- (14) 以下の品数はそれぞれの画譜に描かれた実数であって、元寿自身が目録や帖尾に記した数とは多少異なる。また、品名が記されていないとか、記載があいまいな場合もあり、数値は絶対的なものではない。あくまでも目安と考えてほしい。
- (15) 堀越氏蔵『介譜』自筆本(縦27.7×横19.5cm)は、①巻頭の題字が無い(国会図書館本には『禽譜』と同じく「楽水外史」という人物が揮毫した題字とその印の写しがある)、②画紙の総枚数は同じであり、対応する各画紙内の絵と名称・注記の内容・配置にも本質的相違はないが、画紙貼継ぎの順序が多少違う個所がいくつかある、の2点で国会図書館本と異なる。また、国会図書館本には数個所に脱字・脱文があるほか、自筆本に存在する貝図が1カ所だけ欠落している(名称は記されている)。これらの事実は、国会図書館本の原本が堀越本ではないことを示唆するが、題字がある以上その原本も元寿の自筆本に違いないから、正本と副本の二つがあったと思える。

- (16) 「春之部」全体では文政3年～嘉永元年、「夏之部」文政3年～嘉永2年、「秋之部」文政4年～天保8年、「冬之部」文政4年～嘉永2年。
- (17) 『博物館虫譜』の中に『梅園虫譜』中の図が含まれることは、小西正泰（「虫づくり／虫の博物画」、『虫の日本史』、8-27、新人物往来社、1990年）と西原伊兵衛（「虫譜に見る国蝶オオムラサキ」、同前、44-48）の両氏によって指摘されている。ただ、両氏とも自筆との見解らしいが、筆跡は明らかに梅園のそれではない。
- (18) 『帝国大学図書館和漢書目録』（1891）によると、明治20年（1887）には『梅園介譜』『梅園画譜』各1帖が帝国大学（東大）図書館に所蔵されており、引用文の「残巻二冊」はこの2点を指すのだろう。しかし、これは現存せず、関東大震災による図書館焼失の際に失われたらしい（動物学教室の『禽譜』『魚譜』は現在まで登録されていない）。
- (19) 「梅園圖」の号は、『介譜』『草木花譜 春四』『皇代系譜』（巻3～11）に使われており、『海石榴花譜』序には「武陽麻龍岡居輯」と記されている。
- (20) 注(1)文献と、『江戸幕府旗本人名事典』（原書房、1989）。
- (21) 『新訂寛政重修諸家譜』、16巻、p.185。
- (22) 『皇代系譜』弘化4年（1847）の項に「三月廿五日、元寿元繼元明父子、鼠山〔雜司が谷辺〕より東高野辺、南蔵院、下練馬、下板橋、川越海道〔＝街道〕、採菓。奇品四十五種を獲る」の記事もある。

[謝辞]

国立国会図書館古典籍課の佐久間信子元課長、坂下精一元司書監をはじめ、同課の方々と、東京国立博物館の加藤 寛資料第一研究室長のご理解とご協力がなければ、本研究を進めることは出来なかった。また、堀越増興元東京大学海洋研究所教授には『梅園介譜』自筆本を閲読・複写させていただき、国立科学博物館の吉行瑞子博士にはハクビシンの図の同定で、国会図書館専門資料部の馬場萬夫氏には毛利元寿の印記の撮影でお世話になった。末筆ではあるが、この場を借りて皆様方に厚く御礼を申し上げます。

(いそひ)・なおひで 慶応義塾大学経済学部教授

- ① 毛利蔵書（「毛利」は合字）；② 文政八己酉出来（ほかに文政七年，九年と十二年？の同種印があるが，字体はそれぞれかなり異なる）；③ 天保二辛卯年発帖；④ 榎園直脚花譜家伝画帖蔵印；⑤ 生涯画□兼画筆；⑥ 不認模写；⑦ 毛利□氏之印（「毛利」は合字）；⑧ 榎園直脚；⑨ 直脚；⑩ 梅園；⑪ 元寿式号某園；⑫ 某園之印；⑬ 元寿之印；⑭ 梅元寿印；⑮ 榎園；⑯ 大江氏；⑰ 大江氏；⑱ 白麓；⑲ 白山（？）石瑛；⑳ 茗溪；㉑ 攢花園記；㉒ 攢花園；㉓ 横華園；㉔ 写生斎；㉕ 写生斎；㉖ 榎元寿（「榎」を左右に割っている）；㉗ 梅（梅花の絵）+元寿；㉘ 元寿；㉙ 某園白麓；㉚ 榎+園。

図 4 毛利元寿が用いた印

(それぞれ読みを前ページに示す。掲出印は原寸大)



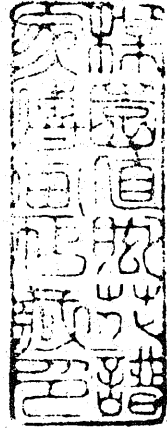
①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



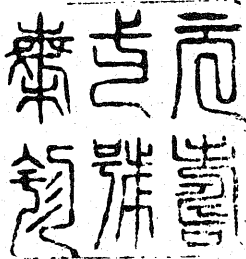
⑧



⑨



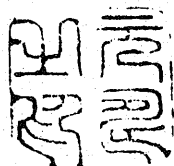
⑩



⑪



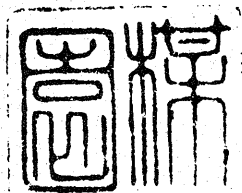
⑫



⑬



⑭



⑮



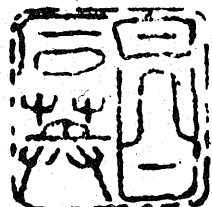
⑯



⑰



⑱



⑲



⑳



㉑



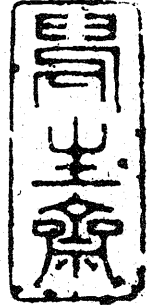
㉒



23



24



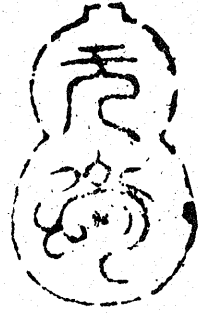
25



26



27



28



29



30